

つくば市の不登校に関する児童生徒支援のあり方 (案)

つくば市教育委員会

令和5年（2023年）●月●日

内容

1	つくば市の不登校児童生徒支援に関する基本理念	2
(1)	つくば市の理念	2
(2)	国の理念	2
2	不登校児童生徒の現状と課題について	3
(1)	つくば市の不登校児童生徒の状況	3
①	つくば市の不登校児童生徒数 ^(※1) 及び割合	3
②	つくば市と茨城県の不登校児童生徒数割合(図2)	4
③	不登校の主な要因と欠席日数ごとの不登校児童生徒数	4
(2)	長期欠席児童生徒アンケート結果等からみるつくば市の不登校児童生徒の状況	5
①	欠席日数	5
②	学校に行かなかった(行けなかった)理由	6
③	学校を休んでいたときの気持ち	8
④	相談・対応に関すること	13
⑤	保護者の困り感	15
3	目指す学校のあり方	17
(1)	一人ひとりに居場所があり活躍できる学校	17
①	安心と心の安定を感じられる絆づくり	17
②	一人ひとりが自分らしく輝ける学校・学級	17
(2)	豊かな学校生活を送ることができる学校	17
①	分かる・楽しい主体的な学び	17
②	多様性や個性を認め伸ばす学校・学級	17
4	不登校児童生徒への支援策	18
(1)	学校内における支援	18
①	学級担任や養護教諭を中心とした教員による教育相談の実施	18
②	スクールカウンセラーによる教育相談	18
③	校内フリースクールの整備	19
(2)	学校外における支援	19
①	教育相談センターでの面談	20
②	学級担任による家庭訪問・スクールソーシャルワーカーによる訪問相談	20
③	公設の不登校児童生徒支援施設の設置	20
④	民間の不登校児童生徒支援施設の運営者への補助	21
⑤	不登校児童生徒の保護者への補助	21
⑥	保護者に対する相談支援	21
⑦	家庭にいる児童生徒への支援	22

1 つくば市の不登校児童生徒支援に関する基本理念

(1) つくば市の理念

つくば市では、一人ひとりが幸せな人生を送ることを最上位の目標とするつくば市教育大綱を令和2年に策定し、個性の違いが受容され、それぞれが持っている多様で豊かな個性が花開く環境をつくることとした。

つくば市における不登校児童生徒支援は、学校に登校することのみを目標にするのではなく、社会的自立に向けた力を育み、一人ひとりが幸せな人生を送ることができるような施策を講じていく。

「社会的自立」については様々な解釈ができるが、ここでは、社会との関わりの中で、他者との関係性を保ち、適切に他者に依存したり自らが必要な支援を求めたりしながら、自分のできることを広げ、自分の意志と判断で、選択、決定し、自己実現（自分の未来）に向けて行動できるようになることであると解釈する。

そのために、不登校児童生徒の現状や支援ニーズの把握に努め、支援の現状を精査するなどした上で、学校、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、不登校児童生徒を支援する者等が連携、協力して社会的な自立に向けた取組を行っていくこととする。

(2) 国の理念

文部科学省では、教育機会の確保等に関する施策を総合的に推進することを目的として、義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律（平成二十八年法律第五号。以下「教育機会確保法」という。）を施行した。同法第三条には、不登校児童生徒に対する教育機会の確保に関する施策について、以下の基本理念が示されている。

- 一 全ての児童生徒が豊かな学校生活を送り、安心して教育を受けられるよう、学校における環境の確保が図られるようにすること。
- 二 不登校児童生徒が行う多様な学習活動の実情を踏まえ、個々の不登校児童生徒の状況に応じた必要な支援が行われるようにすること。
- 三 不登校児童生徒が安心して教育を十分に受けられるよう、学校における環境の整備が図られるようにすること。
- 四 義務教育の段階における普通教育に相当する教育を十分に受けていない者の意思を十分に尊重しつつ、その年齢又は国籍その他の置かれている事情にかかわらず、その能力に応じた教育を受ける機会が確保されるようにするとともに、その者が、その教育を通じて、社会において自立的に生きる基礎を培い、豊かな人生を送ることができるよう、その教育水準の維持向上が図られるようにすること。
- 五 国、地方公共団体、教育機会の確保等に関する活動を行う民間の団体その他の関係者の相互の密接な連携の下に行われるようにすること。

また、令和元年には、「不登校児童生徒への支援のあり方について（元文科初第 698 号令和元年 10 月 25 日付け文部科学省初等中等教育局長通知）」が文部科学省から発出され、不登校児童生徒への支援は、「学校に登校する」という結果のみを目標にするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す必要があることが示されている。

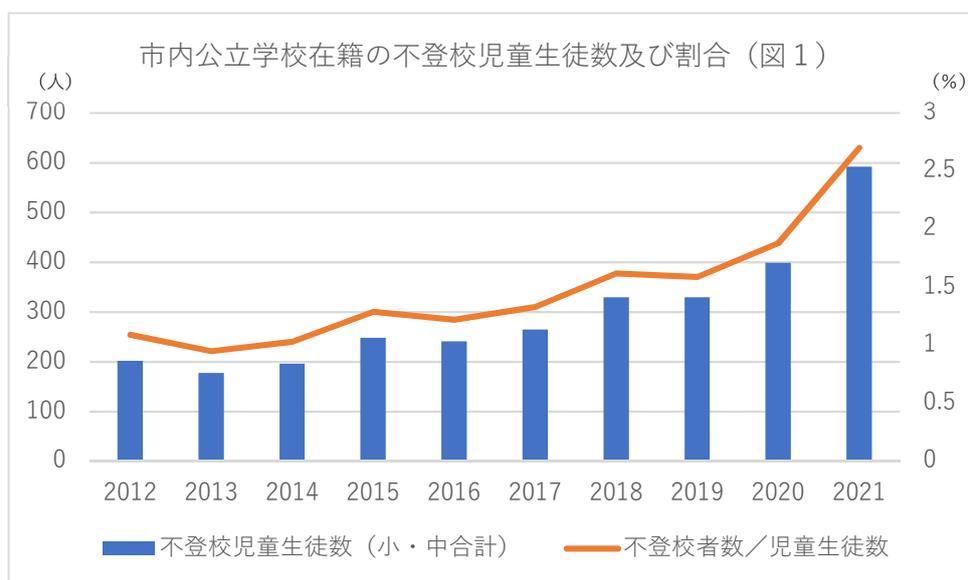
2 不登校児童生徒の現状と課題について

(1) つくば市の不登校児童生徒の状況

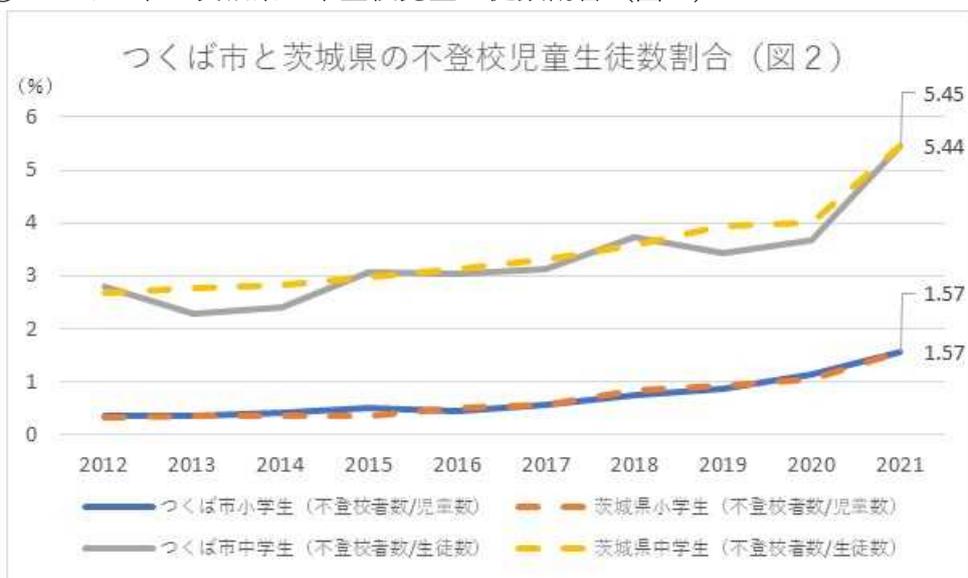
① つくば市の不登校児童生徒数^(※1)及び割合

つくば市では不登校児童生徒数が増加傾向にあり、全児童生徒数に対する不登校児童生徒数の割合も増加している。

(※1) 文部科学省に報告する年間欠席日数が 30 日以上



② つくば市と茨城県の不登校児童生徒数割合（図2）



つくば市、茨城県ともに小学生に比べ中学生の方が不登校児童生徒数の割合が高い。つくば市における不登校児童生徒数の割合は年々増加しており、令和3年（2021年）は不登校児童生徒数の割合が小学生は1.57%、中学生は5.45%であった。小学生が0.35%、中学生が2.28%であった平成25年（2013年）と比較すると、小学生で1.22ポイント、中学生で3.17ポイント増加している。

③ 不登校の主な要因と欠席日数ごとの不登校児童生徒数

令和3年度末の不登校児童生徒数は592人（小学校243人、中学校349人）であった。

令和3年度不登校児童生徒要因別欠席日数別人数

主な 要因 欠席 日数	本人		家庭			学校								その他	合計	割合
	生活 リズム等	無気力 不安	家庭 環境	親子 関係	家庭内 不和	いじめ	友人 関係	教職員	学業	進路	部活	きまり	進級			
30～49	23	64	20	3	0	0	19	0	8	2	0	2	2	8	151	25.5%
50～99	30	78	18	5	2	1	13	3	10	0	0	2	0	15	177	29.9%
100～149	17	87	9	5	0	0	10	1	5	0	0	0	0	4	138	23.3%
150～	10	65	16	6	1	0	14	3	3	0	0	1	1	6	126	21.3%
合計	80	294	63	19	3	1	56	7	26	2	0	5	3	33	592	
	374		85			100								33	592	

(2) 長期欠席児童生徒アンケート結果等からみるつくば市の不登校児童生徒の状況

令和4年（2022年）7月、学校生活での悩みや欠席の要因、希望する支援や対応等を把握し、つくば市や学校が今後行う支援のあり方を検討するため、令和3年度に年間30日以上在籍校を欠席した児童生徒及び保護者のうち、学校からアンケート用紙を配付することができた児童生徒及び保護者各581名を対象に、アンケート調査を実施した。

児童生徒アンケートの回答者数は、小学生71名、中学生102名、無回答2名の合計175名（回答率30.1%）であった。

保護者アンケートの回答者数は、小学生の保護者85名、中学生の保護者116名、無回答1名の合計202名（回答率34.7%）であった。

児童生徒アンケートの回答者数（学年は、回答者自身の令和4年度の学年）

2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	7年生	8年生	9年生	無回答	合計	小学生	中学生
7	13	12	14	25	24	33	45	2	175	71	102

保護者アンケートの回答者数（学年は、回答した保護者の子供の令和4年度の学年）

2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	7年生	8年生	9年生	無回答	小学生	中学生
12	17	13	16	27	29	40	47	1	85	116

① 欠席日数

児童生徒アンケート（小学生 71名）：令和3年度に学校を欠席した、だいたいの日数

選択肢	回答数	割合
30日から60日	18	25.4%
60日から90日	11	15.5%
90日から180日	13	18.3%
180日以上（ほとんどすべて欠席した）	28	39.4%
無回答	1	1.4%

児童生徒アンケート（中学生 102名）：令和3年度に学校を欠席した、だいたいの日数

選択肢	回答数	割合
30日から60日	23	22.5%
60日から90日	24	23.5%
90日から180日	15	14.7%
180日以上（ほとんどすべて欠席した）	38	37.3%
無回答	2	2.0%

児童生徒アンケートによると、「令和3年度に学校を欠席した、だいたいの日数」としてあてはまるものは、小学生、中学生ともに「180日以上」が最も多かった。

② 学校に行かなかった（行けなかった）理由

児童生徒アンケート（小学生 71名）：学校に行かなかった（行けなかった）理由

選択肢	1 よくあてはまる	2 ややあてはまる	3 どちらともいえない	4 あまりあてはまらない	5 まったくあてはまらない	無回答	あてはまるの割合(1+2)
身体の不調（学校に行こうとするとお腹が痛くなったなど）	24	11	6	7	23	0	49.3%
新型コロナウイルス感染症に関すること	11	9	6	10	35	0	28.2%
友達のこと（いやがらせやいじめがあったなど）	1	10	10	5	45	0	15.5%
学校の先生のこと（先生が怖かった、先生と合わなかったなど）	8	7	8	7	41	0	21.1%
勉強のこと（勉強がわからなかった、授業がおもしろくなかったなど）	9	14	10	6	32	0	32.4%
家庭のこと（親と仲が悪い、親の注意がうるさかったなど）	1	2	7	9	52	0	4.2%
生活リズムの乱れ（朝起きられなかったなど）	5	10	10	10	36	0	21.1%
なんとなくやる気がでなかった	15	16	8	8	24	0	43.7%
インターネット、ゲームなどの影響（楽しくてやめられなかったなど）	1	6	7	18	39	0	9.9%

児童生徒アンケート（中学生 102名）：学校に行かなかった（行けなかった）理由

選択肢	1 よくあてはまる	2 ややあてはまる	3 どちらともいえない	4 あまりあてはまらない	5 まったくあてはまらない	無回答	あてはまるの割合(1+2)
身体の不調（学校に行こうとするとお腹が痛くなったなど）	34	19	6	19	23	1	52.0%
新型コロナウイルス感染症に関すること	2	9	5	10	75	1	10.8%
友達のこと（いやがらせやいじめがあったなど）	12	13	13	7	57	0	24.5%
学校の先生のこと（先生が怖かった、先生と合わなかったなど）	4	9	11	13	64	1	12.7%
勉強のこと（勉強がわからなかった、授業がおもしろくなかった	18	21	16	7	38	2	38.2%
家庭のこと（親と仲が悪い、親の注意がうるさかったなど）	7	4	17	11	62	1	10.8%
生活リズムの乱れ（朝起きられなかったなど）	19	32	13	6	31	1	50.0%
なんとなくやる気がでなかった	41	20	10	9	21	1	59.8%
インターネット、ゲームなどの影響（楽しくてやめられなかった	11	18	8	15	49	1	28.4%

児童生徒アンケートによると、「学校に行かなかった（行けなかった）理由」としてあてはまるものは、小学生は「身体の不調」、「なんとなくやる気がでなかった」、「勉強のこと」の順に多かった。中学生では「なんとなくやる気がでなかった」、「身体の不調」、「生活リズムの乱れ」の順に多く、全回答者の5割以上を占めていた。

両者を比較すると、「新型コロナウイルス感染症に関すること」が小学生では17.4ポイント高く、「生活リズムの乱れ」、「なんとなくやる気がでなかった」は中学生の方がそれぞれ28.9ポイント、16.1ポイント高かった。

保護者アンケート（小学生 71名）：学校に行かなかった（行けなかった）理由

選択肢	1 よくあてはまる	2 ややあてはまる	3 どちらともいえない	4 あまりあてはまらない	5 まったくあてはまらない	無回答	あてはまるの割合(1+2)
身体の不調	32	11	5	14	23	0	50.6%
新型コロナウイルス感染症に関すること	18	14	11	9	33	0	37.6%
友達のこと	5	14	9	15	41	1	22.4%
学校の先生のこと	13	13	11	15	32	1	30.6%
勉強のこと	7	16	16	15	30	1	27.1%
家庭の事情	6	5	15	14	44	1	12.9%

保護者アンケート（中学生 102名）：学校に行かなかった（行けなかった）理由

選択肢	1 よくあてはまる	2 ややあてはまる	3 どちらともいえない	4 あまりあてはまらない	5 まったくあてはまらない	無回答	あてはまるの割合(1+2)
身体の不調	47	21	11	15	18	4	58.6%
新型コロナウイルス感染症に関すること	5	21	15	25	47	3	22.4%
友達のこと	21	29	21	20	23	2	43.1%
学校の先生のこと	12	13	25	29	33	4	21.6%
勉強のこと	23	25	22	17	25	4	41.4%
家庭の事情	8	12	18	28	47	3	17.2%

保護者アンケートによると、子供が「学校に行かなかった（行けなかった）理由」としてあてはまるものは、小学生は「身体の不調」、「新型コロナウイルス感染症に関すること」、「学校の先生のこと」の順に多かった。中学生では「身体の不調」、「友達のこと」、「勉強のこと」の順に多く、全回答者の4割以上を占めていた。

両者を比較すると、「新型コロナウイルス感染症に関すること」が小学生では15.2ポイント高く、「勉強のこと」は中学生の方が14.3ポイント高かった。

③ 学校を休んでいたときの気持ち

児童生徒アンケート（小学生 71名）：学校を休んでいたときに感じたこと、思ったこと

選択肢	1 よくあてはまる	2 ややあてはまる	3 どちらともいえない	4 あまりあてはまらない	5 まったくあてはまらない	無回答	あてはまるの割合(1+2)
勉強の遅れが心配だった	13	20	13	6	18	1	46.5%
友達との関係が心配だった	11	12	7	9	31	1	32.4%
ほっとした、安心した	15	12	18	10	15	1	38.0%
気持ちが落ち込んだ	9	12	10	11	27	2	29.6%
学校に行きたかった	14	15	10	8	23	1	40.8%
自由な時間が増えてうれしかった	18	14	16	13	9	1	45.1%

児童生徒アンケート（中学生 102名）：学校を休んでいたときに感じたこと、思ったこと

選択肢	1 よくあてはまる	2 ややあてはまる	3 どちらともいえない	4 あまりあてはまらない	5 まったくあてはまらない	無回答	あてはまるの割合(1+2)
勉強の遅れが心配だった	38	28	8	8	15	5	64.7%
友達との関係が心配だった	19	14	16	16	31	6	32.4%
ほっとした、安心した	15	14	33	10	26	4	28.4%
気持ちが落ち込んだ	22	16	19	13	27	5	37.3%
学校に行きたかった	11	16	21	18	31	5	26.5%
自由な時間が増えてうれしかった	24	26	16	18	13	5	49.0%

児童生徒アンケートによると、「学校を休んでいたときに感じたこと、思ったこと」としてあてはまるものは、小学生は「勉強の遅れが心配だった」、「自由な時間が増えてうれしかった」、「学校に行きたかった」の順に高く、全回答者の4割以上を占めた。中学生では「勉強の遅れが心配だった」、「自由な時間が増えてうれしかった」、「気持ちが落ち込んだ」の順に高かった。

「勉強の遅れが心配だった」と回答した割合は、中学生の方が小学生よりも18.2ポイント高く、中学生の約3分の2が勉強の遅れを懸念していることが示された。一方で、「学校に行きたかった」と回答した割合は、小学生の方が中学生よりも14.3ポイント高かった。

児童生徒アンケート（小学生 71名）長期欠席中の対応でいやだった対応

選択肢	1 よくあてはまる	2 ややあてはまる	3 どちらともいえない	4 あまりあてはまらない	5 まったくあてはまらない	無回答	あてはまるの割合(1+2)
先生の家庭訪問	4	5	6	13	41	2	12.7%
先生と面談で話すこと	5	2	12	12	38	2	9.9%
友達からの声かけ	3	10	11	13	33	1	18.3%
学校以外の相談窓口で相談すること	2	3	15	7	42	2	7.0%

児童生徒アンケート（中学生 102名）長期欠席中の対応でいやだった対応

選択肢	1 よくあてはまる	2 ややあてはまる	3 どちらともいえない	4 あまりあてはまらない	5 まったくあてはまらない	無回答	あてはまるの割合(1+2)
先生の家庭訪問	9	9	26	14	39	5	17.6%
先生と面談で話すこと	12	11	24	19	31	5	22.5%
友達からの声かけ	11	12	24	13	37	5	22.5%
学校以外の相談窓口で相談すること	7	7	19	11	50	8	13.7%

児童生徒アンケートによると、「いやだった対応」としてあてはまるものは、小学生、中学生ともに「友達からの声かけ」が最も多かった。さらに、中学生は「先生と面接で話すこと」も「友達からの声かけ」と同ポイントで、いやだった対応であった。

児童生徒アンケート（小学生 71名）：どんな学校だったら行きたいと思うか

選択肢	1 よくあてはまる	2 ややあてはまる	3 どちらともいえない	4 あまりあてはまらない	5 まったくあてはまらない	無回答	あてはまるの割合(1+2)
いつ行ってもいい	25	17	11	5	12	1	59.2%
ゆっくり休める場所がある	22	22	9	8	10	0	62.0%
一人になれる場所がある	18	13	15	10	15	0	43.7%
好きな勉強ができる	22	28	10	5	6	0	70.4%
友達といっぱい遊べる	34	11	11	8	7	0	63.4%
気軽に先生と話せる	25	14	11	12	9	0	54.9%
先生が声をかけてくれる	18	14	19	13	7	0	45.1%
特にない	9	5	20	7	29	1	19.7%
わからない	9	9	16	6	30	1	25.4%

児童生徒アンケート（中学生 102名）：どんな学校だったら行きたいと思うか

選択肢	1 よくあてはまる	2 ややあてはまる	3 どちらともいえない	4 あまりあてはまらない	5 まったくあてはまらない	無回答	あてはまるの割合(1+2)
いつ行ってもいい	37	24	15	8	15	3	59.8%
ゆっくり休める場所がある	50	16	14	6	12	4	64.7%
一人になれる場所がある	39	18	13	14	14	4	55.9%
好きな勉強ができる	38	24	16	7	13	4	60.8%
友達といっぱい遊べる	25	16	25	19	13	4	40.2%
気軽に先生と話せる	27	24	22	9	16	4	50.0%
先生が声をかけてくれる	21	18	27	13	18	5	38.2%
特にない	21	7	28	9	32	5	27.5%
わからない	13	8	29	10	35	7	20.6%

児童生徒アンケートによると、「どんな学校だったら行きたいと思うか」にあてはまるものは、小学生は「好きな勉強ができる」、「友達といっぱい遊べる」、「ゆっくり休める場所がある」の順に多く、全回答者の6割以上を占めた。さらに、「いつ行ってもいい」、「気軽に先生と話せる」も全回答者の半数以上を占めた。

一方、中学生では「ゆっくり休める場所がある」、「好きな勉強ができる」、「いつ行ってもいい」の順に多く、回答者の約6割以上を占めた。さらに、「一人になれる場所がある」、「気軽に先生と話せる」も全回答者の半数以上を占めた。

両者を比較すると、「友達といっぱい遊べる」は小学生の方が中学生よりも23.2ポイント高く、「一人になれる場所がある」は中学生の方が小学生よりも12.2ポイント高かった。

児童生徒アンケート（小学生 75名）：学校を休んでいるときにあったと思うもの

選択肢	1 よくあてはまる	2 ややあてはまる	3 どちらともいえない	4 あまりあてはまらない	5 まったくあてはまらない	無回答	あてはまる割合(1+2)
勉強を教えてくれる人	6	11	25	9	17	3	23.9%
一緒に遊ぶ人	22	22	9	8	10	0	62.0%
相談できる人	18	13	15	10	15	0	43.7%
一人になれる場所	22	28	10	5	6	0	70.4%
一人になれる時間	34	11	11	8	7	0	63.4%
人が集まる場所	25	14	11	12	9	0	54.9%
特にない	18	14	19	13	7	0	45.1%

児童生徒アンケート（中学生 102名）：学校を休んでいるときにあったと思うもの

選択肢	1 よくあてはまる	2 ややあてはまる	3 どちらともいえない	4 あまりあてはまらない	5 まったくあてはまらない	無回答	あてはまる割合(1+2)
勉強を教えてくれる人	28	20	14	14	19	7	47.1%
一緒に遊ぶ人	50	16	14	6	12	4	64.7%
相談できる人	39	18	13	14	14	4	55.9%
一人になれる場所	38	24	16	7	13	4	60.8%
一人になれる時間	25	16	25	19	13	4	40.2%
人が集まる場所	27	24	22	9	16	4	50.0%
特にない	21	18	27	13	18	5	38.2%

児童生徒アンケートによると、「学校を休んでいるときにあったと思うもの」は、小学生は「一人になれる場所」、「一人になれる時間」、「一緒に遊ぶ人」の順に多く、全回答者の6割以上を占めた。中学生では「一緒に遊ぶ人」、「一人になれる場所」、「相談できる人」の順に多かった。

両者を比較すると、「一人になれる時間」は小学生の方が中学生よりも23.2ポイント高く、「勉強を教えてくれる人」、「相談できる人」は中学生の方が小学生よりもそれぞれ23.2ポイント、12.2ポイント高かった。

小学生の保護者アンケート（85名）：お子さんが学校を休んでいるときに過ごしてほしい場所

選択肢	1 よくあてはまる	2 ややあてはまる	3 どちらともいえない	4 あまりあてはまらない	5 まったくあてはまらない	無回答	あてはまるの割合(1+2)
勉強を教えてくれる場所	21	25	13	7	18	1	54.1%
自由に過ごせる場所	36	25	9	3	11	1	71.8%
一人で遊べる場所	28	21	12	7	16	1	57.6%
のんびりできる場所	36	20	14	5	9	1	65.9%
誰かと関われる場所	29	6	9	9	31	1	41.2%
特にない	10	0	7	0	9	59	11.8%

中学生の保護者アンケート（116名）：お子さんが学校を休んでいるときに過ごしてほしい場所

選択肢	1 よくあてはまる	2 ややあてはまる	3 どちらともいえない	4 あまりあてはまらない	5 まったくあてはまらない	無回答	あてはまるの割合(1+2)
勉強を教えてくれる場所	54	30	16	7	5	4	72.4%
自由に過ごせる場所	41	30	22	12	7	4	61.2%
一人で遊べる場所	32	28	22	19	11	4	51.7%
のんびりできる場所	43	33	18	12	6	4	65.5%
誰かと関われる場所	30	21	23	15	24	3	44.0%
特にない	6	2	8	7	17	76	6.9%

保護者アンケートによると、「お子さんが学校を休んでいるときに過ごしてほしい場所」は、小学生は「自由に過ごせる場所」、「のんびりできる場所」、「一人で遊べる場所」の順に多かった。中学生では「勉強を教えてくれる場所」、「のんびりできる場所」、「自由に過ごせる場所」の順に多かった。

両者を比較すると、「自由に過ごせる場所」は、小学生の方が中学生よりも 10.6 ポイント高く、「勉強を教えてくれる場所」は、中学生の方が小学生よりも 18.3 ポイント高かった。

④ 相談・対応に関すること

児童生徒アンケート（小学生 71名）：担任の先生や家族以外で、学校に行かなかった（行けなかった）ことを相談した人

選択肢	回答数
学校のカウンセラー	10
担任以外の先生（保健室の先生など）	6
フリースクールの人	5
病院の先生	15
相談した人はいない	15
その他	10

児童生徒アンケート（中学生 102名）：担任の先生や家族以外で、学校に行かなかった（行けなかった）ことを相談した人

選択肢	回答数
学校のカウンセラー	24
担任以外の先生（保健室の先生など）	17
フリースクールの人	9
病院の先生	33
相談した人はいない	18
その他	17

児童生徒アンケートによると、「担任の先生や家族以外で、学校に行かなかった（行けなかった）」ことについて相談した人は、小学生は「病院の先生」、「相談した人はいない」、「学校のカウンセラー」の順に多かった。中学生では「病院の先生」、「学校のカウンセラー」、「相談した人はいない」の順に多かった。

小学生の保護者アンケート（85名）：お子さんの担任以外で、お子さんの学校のことを相談した機関

選択肢	回答数
スクールカウンセラー	33
スクールソーシャルワーカー	8
つくば市教育相談センター	21
フリースクールなど民間団体の相談窓口	16
病院、診療所	33
児童相談所	1
その他	17

中学生の保護者アンケート（116名）：お子さんの担任以外で、お子さんの学校のことを相談した機関

選択肢	回答数
スクールカウンセラー	36
スクールソーシャルワーカー	12
つくば市教育相談センター	30
フリースクールなど民間団体の相談窓口	19
病院、診療所	63
児童相談所	6
その他	19

保護者アンケートによると、「お子さんの担任以外で、お子さんの学校のことを相談した機関」は、小学生は「スクールカウンセラー」、「病院、診療所」、「つくば市教育相談センター」の順に多かった。中学生は「病院、診療所」、「スクールカウンセラー」、「つくば市教育相談センター」の順に多かった。中学生が全回答者の半数以上が「病院、診療所」で相談を行っていた。

⑤ 保護者の困り感

小学生の保護者アンケート（85名）：お子さんのことで困っていること

選択肢	1 よくあてはまる	2 ややあてはまる	3 どちらともいえない	4 あまりあてはまらない	5 まったくあてはまらない	無回答	あてはまる割合(1+2)
勉強の遅れや学力の低下	24	18	10	14	16	3	49.4%
進路（進学・就職など）	15	17	9	19	22	3	37.6%
昼夜逆転など生活リズムの乱れ	5	13	8	21	35	3	21.2%
ゲームやインターネット依存	11	16	19	15	21	3	31.8%
家族に対する暴言や暴力	1	8	3	13	57	3	10.6%
気持ちが不安定になっている（イライラ、焦り、不安など）	6	22	8	14	32	3	32.9%

中学生の保護者アンケート（116名）：お子さんのことで困っていること

選択肢	1 よくあてはまる	2 ややあてはまる	3 どちらともいえない	4 あまりあてはまらない	5 まったくあてはまらない	無回答	あてはまる割合(1+2)
勉強の遅れや学力の低下	58	27	11	8	3	9	73.3%
進路（進学・就職など）	61	22	12	10	3	8	71.6%
昼夜逆転など生活リズムの乱れ	24	22	9	28	24	9	39.7%
ゲームやインターネット依存	25	30	23	17	12	9	47.4%
家族に対する暴言や暴力	3	10	9	15	70	9	11.2%
気持ちが不安定になっている（イライラ、焦り、不安など）	18	31	15	22	22	8	42.2%

保護者アンケートによると、「今、お子さんのことで困っていること」は、小学生は「勉強の遅れや学力の低下」、「進路（進学・就職など）」、「気持ちが不安定になっている」の順に多かった。中学生は「勉強の遅れや学力の低下」、「進路（進学・就職など）」、「ゲームやインターネット依存」の順に多かった。特に前2項目については7割以上の保護者があてはまるとしていた。

両者を比較すると、全ての項目で中学生の方が小学生よりもあてはまる割合が多かった。両者の差が大きい主なものは、「進路（進学・就職など）」、「勉強の遅れや学力の低下」、「昼夜逆転など生活リズムの乱れ」、「ゲームやインターネット依存」が挙げられ、それぞれ34.0ポイント、23.9ポイント、18.5ポイント、15.6ポイントの順に差があった。

小学生の保護者アンケート（85名）：保護者として困っていること

選択肢	1 よくあてはまる	2 ややあてはまる	3 どちらともいえない	4 あまりあてはまらない	5 まったくあてはまらない	無回答	あてはまる割合(1+2)
悩みを聞いてもらえる機関や場所が見つからない（または分からない）	2	10	18	22	30	3	14.1%
子供とどう関われば良いか分からない	3	15	12	17	35	3	21.2%
学校の情報が入ってこない	2	8	18	26	29	2	11.8%
学校を休むことについて家族の理解が得られない	2	9	7	24	42	1	12.9%
金銭的な負担が増えた	24	16	8	15	21	1	47.1%

中学生の保護者アンケート（116名）：保護者として困っていること

選択肢	1 よくあてはまる	2 ややあてはまる	3 どちらともいえない	4 あまりあてはまらない	5 まったくあてはまらない	無回答	あてはまる割合(1+2)
悩みを聞いてもらえる機関や場所が見つからない（または分からない）	7	22	20	31	28	8	25.0%
子供とどう関われば良いか分からない	6	25	16	33	28	8	26.7%
学校の情報が入ってこない	7	25	20	33	23	8	27.6%
学校を休むことについて家族の理解が得られない	8	19	9	34	44	2	23.3%
金銭的な負担が増えた	24	24	19	24	22	3	41.4%

保護者アンケートによると、「今保護者として困っていること」は、小学生は「金銭的な負担が増えた」、「子供とどう関われば良いか分からない」、「悩みを聞いてもらえる機関や場所が見つからない（または分からない）」の順に多かった。中学生は「金銭的な負担が増えた」、「学校の情報が入ってこない」、「子供とどう関われば良いか分からない」の順に多かった。

両者を比較すると、どちらも4割以上の保護者が「金銭的な負担が増えた」ことで困っていると回答した。また、「学校の情報が入ってこない」は、中学生の方が小学生よりも15.8ポイント高かった。

3 目指す学校のあり方

不登校はどの児童生徒にも起こりうることでありとの認識のもと、学校がすべての児童生徒にとって安心と魅力のある場となり、不登校を生じさせない、児童生徒が登校したくなるような学校づくりを行う必要がある。今回の不登校児童生徒アンケート結果からも、「ゆっくり休める」、「好きな勉強ができる」、「友達といっぱい遊べる」学校であったら行きたいと感じている児童生徒多く、そのためにも学校は、一人ひとりを大切にし、思いやペースに配慮できる居場所であり、豊かな学校生活を実感できる場を目指したい。

(1) 一人ひとりに居場所があり活躍できる学校

① 安心と心の安定を感じられる絆づくり

児童生徒への深い理解や愛情に基づき、児童生徒相互の良好な人間関係や児童生徒と教員との信頼関係を育み、児童生徒の心理的安全性が保証されるようにする。また、学級担任と児童生徒の積極的なコミュニケーションからだれとでも相談できる体制をつくり、日々の困り感に寄り添うことができる相談体制を目指す。

② 一人ひとりが自分らしく輝ける学校・学級

児童生徒が一つのことをやり遂げる時間や場が保障されるとともに、一人ひとりの役割があり自分で考え、判断し、活動できるようにする。児童生徒が自分の良さを発見し、それを磨くことで、達成感や充実感を実感できるような学校・学級を目指す。

(2) 豊かな学校生活を送ることができる学校

① 分かる・楽しい主体的な学び

児童生徒の実態をもとに個に応じて個別最適に学び、納得感を得られ、学びに向かう力を得られるような学びになるようにする。また、他者と協力し合いながら学ぶとともに、身近な事柄からの学習課題を設定したり、自分で学習方法を選択するなど、主体的・協働的な学びの中に楽しさを感じられるようにする。

② 多様性や個性を認め伸ばす学校・学級

学習場面だけでなく、学級活動、児童会・生徒会活動、学校行事などの学校活動を通じて、児童生徒がお互いの良さや違いを認め、尊重し合いながら課題に取り組む。これらの体験活動を通し、思いやりのある心が育ち、一人ひとりの自己肯定感が高まるような学校・学級を目指す。

また、令和4年度に実施した長期欠席児童生徒アンケートは、なかなか対面では言いにくい学校に行けなかった理由や学校に対する思い、子どもたちの希望などを調査した貴重な資料である。目指す学校のあり方を体現するためには、このアンケート結果を、つくば市立学校に勤務する全ての教職員が読み込み、理解するとともに、結果を踏まえた研修を実施し、全ての教職員が不登校に関する児童生徒の気持ちに寄り添いながら、学校経営や学級経営に取り組むことが重要である。

4 不登校児童生徒への支援策

つくば市の不登校児童生徒支援に関する基本理念に基づいて、学校内における支援と学校外における支援に分けて記述する。

(1) 学校内における支援

学校内における支援に関しては、特定の教員だけが関わるのではなく、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーなどの学校支援スタッフを含め、すべての学校教職員がチームとして対応する必要がある。児童生徒の中には、不登校状態ではないが、学習の遅れや進路、友人関係、家庭のことなど、様々な悩みを抱えながら頑張っている者もいる。悩みを抱えている児童生徒の中には、担任以外の教職員の方が相談しやすい場合もあり、そのような児童生徒のためにも、全教職員で児童生徒の支援に当たり、悩み事や困りごとに対して早期に対応するとともに、児童生徒が相談しにくい状況に陥らないようにする必要がある。また、教員が悩みに気付いて声を掛けられることも重要であるが、児童生徒が自ら相談できる環境も必要である。誰かに話したり、相談したりすることで気持ちが落ち着き、前向きに考えられるように支援していく。

① 学級担任や養護教諭を中心とした教員による教育相談の実施

保護者アンケートでは、子供の「勉強の遅れや学力の低下」及び「進路」に関する困り感が高いことが明らかになった。学級担任を中心に、積極的に情報提供や助言をすることで、将来的な展望を含めた支援することができる。

思春期は困りごとがあっても、自分から大人に相談しづらいことが多い。家族以外でもっとも身近な大人である担任の先生や保健室の先生が気軽に相談できる存在であり、困ったときは相談して良い、相談することは恥ずかしいことではない、という意識を児童生徒に持たせる取組も必要である。

② スクールカウンセラーによる教育相談

児童生徒及び保護者アンケートによると、回答者の約2～3割がスクールカウンセラーへの相談経験があった。つくば市では、スクールカウンセラーが令和4年度に21人勤務しているが、相談件数が増加しており、新規の相談が取りにくかったり、次回の相談予約が数か月先になってしまったりする現状がある。また、スクールカウンセラーの業務は、児童生徒や保護者からの相談を継続的に受けるだけでなく、児童生徒に対するアセスメントの実施、教員に対する助言や関係機関との調整や協議等も必要に応じて行っている。さらに、各学校での勤務は月に1～2回程度であることが多いため、現行の人員では、必要とされている支援に答えきれていない。

この状況を打開するため、令和5年度から令和7年度にかけて、スクールカウンセラーを1学校に1人配置できるように、増員を図っていくとともに、緊急時等には勤務校以外であって

も弾力的に相談を受けられるようにする。

③ 校内フリースクールの整備

児童生徒アンケートによると、小学生の半数以上が「好きな勉強ができる」、「ゆっくり休める場所がある」、「いつ行ってもいい」学校なら行きたいと回答し、中学生も半数以上が「ゆっくり休める場所がある」、「好きな勉強ができる」、「いつ行ってもいい」学校なら行きたいと回答した。このことから、学校はいつ行ってもよく、好きな勉強ができて、ゆっくり休める場所が欲しいと児童生徒が考えていることが分かった。

この環境を整備するため、つくば市立学校では、余裕教室等を活用し、児童生徒の相談や教育指導を行う専任職員を配置した校内フリースクールを整備する。児童生徒や保護者にとっては、家から近く通いやすいこと、クラスにいる友人との交流がしやすいこと、専任職員が常駐するため信頼感や安心感を持てること、利用料が無料であること等がメリットになる。一方、学校にとっては、専任職員が中核となって児童生徒の状況を継続的に把握できる、学習内容を把握しており指導要録に反映させやすい等のメリットがあり、児童生徒への充実した支援が望める。

令和5年度は、中学校及び義務教育学校後期課程において、既に校内フリースクールを実施しているモデル校1校を除いた16校に、小学校及び義務教育学校前期課程において、校内フリースクールの試行的実施として（不登校児童が多い学校）6校程度にそれぞれ設置を予定する。実施に当たり、モデル校のノウハウを生かした研修を実施する予定である。この取組を推進し、最終的には校内フリースクールをつくば市立学校全てに設置することを目指す。

現在、つくば市立学校の多くで、保健室や余裕教室を活用した別室登校を実施しており、空き時間の教員を中心に、カウンセリングだけでなく学習支援も実施している。来年度以降、校内フリースクールを設置しない学校においても、別室登校の取組は継続又は拡充できるよう取り組みを進め、少しでも児童生徒が教室以外に落ち着ける場所を作れるよう努める。

(2) 学校外における支援

家から出ることができない児童生徒や、学校内の教員には相談しづらいと感じる児童生徒や保護者に対しては、学校外での支援が必要である。家から出られない児童生徒は、家族以外と関わる機会が少なく、学習面や精神面等の支援を受けられない状況にある者もいると思われる。また、学校内の教員以外に相談したくても、相談先が分からずに支援を受けられない者もいる。そういった状況を改善、解消するために、様々な取組を実施する。

児童生徒へのアンケートによると、「学校を休んでいるときにあるとよかったと思うもの」として、「一緒に遊ぶ人」と回答した者が6割以上、「人が集まる場所」と回答した者が5割以上おり、他者との関わりを求めている様子が見える。

その一方で、「学校を休んでいるときにあるとよかったと思うもの」として、「一人になれる場所」と回答した者が6割以上、「一人になれる時間」と回答した者が小学生で6割以上、中学生で4割以上いるように、一人で過ごしたいという意思も尊重する必要がある。

また、保護者へのアンケートによると、「お子さんが学校を休んでいるときに過ごしてほしい場所」として、小学生、中学生ともに6割以上が「自由に過ごせる場所」、「のんびりできる場所」と回答しており、学習支援や精神面での支援のみならず、まずはゆっくり落ち着けることが必要であると認識していることも推測できる。

① つくば市教育相談センターでの面談

保護者アンケートによると、回答者の4人に1人はつくば市教育相談センターでの相談を経験していた。同センターでは、教育相談を担当する教育相談員を令和4年度は8人配置しているが、教育相談件数は年々増加傾向にあるため、相談の予約が取りにくい現状がある。また、つくしの広場を担当する教育相談員を令和4年度は2人配置しているが、入級者が増加傾向にあり、学習指導や体験活動等の集団活動の指導など、対応する人員の確保が課題である。

この状況を打開し、より充実した支援を提供するため、令和5年度は、教育相談担当の教育相談員を8人から10人に、つくしの広場担当の教育相談員を2人から3人に増員する。

② 学級担任による家庭訪問・スクールソーシャルワーカーによる訪問相談

現在、児童生徒が3日連続して学校を休んだ場合に、児童生徒の近況を確認したり、手紙を渡したりするため、学級担任が家庭訪問をしている。家庭訪問により、担任が子供のことを気にかけていることを伝えることができ、長期的な不登校につながらないような関係づくりができる。一方で、児童生徒アンケートによれば、回答者の約1～2割が「家庭訪問をされていやだった」と回答しており、家庭訪問をする際には、保護者や児童生徒の意思を確認した上で行う必要がある。

また、児童生徒だけではなく、家庭や環境への働きかけが必要である場合には、スクールソーシャルワーカーを活用して支援に当たる。つくば市では、スクールソーシャルワーカーが令和4年度に8人勤務し、問題を抱える児童生徒が置かれた環境への働きかけや学校での相談業務、家庭訪問等を行っている。より充実した生活相談やアウトリーチを行うため、令和5年度から令和7年度にかけて、スクールソーシャルワーカーを1学園に1人配置できるように、増員を図っていく。

③ 公設の不登校児童生徒支援施設の設置

つくば市では、教育支援センター「つくしの広場」に加え、民間事業者に委託した不登校児童生徒支援施設を2か所設置し、約80名の児童生徒を受け入れている。これらの施設では、児童

生徒を学校に復帰させることのみを目的とせず、自主性や社会的適応力等を身に付けることができるような支援を行っている。そのために、一人ひとりに合わせた学習支援や、落ち着いて過ごすことができる居場所の提供を行っている。

さらに、児童生徒の在籍校に対して、学習や活動の様子を共有することで、学校での出席扱いとしたり、学校への登校を再開する際に、学習の状況を事前に把握しておくことで、スムーズに対応することができる。

④ 民間の不登校児童生徒支援施設の運営者への補助

不登校児童生徒の中には、市内外の民間フリースクールなどの不登校児童生徒支援施設を利用している者がいる。各施設は特徴を生かし、教科学習の指導に力を入れたり、子供たちの主体性を尊重した様々な活動をししたりしている。

不登校児童生徒の学習や相談の機会や居場所の提供を行うフリースクール等民間施設の活動を支援するため、民間施設運営者に対して、児童生徒の支援体制整備及び運営に係る経費を支援し、児童生徒が社会において自立的に生きる基礎を培うための選択肢の充実を図る。

居場所支援を行う職員の人件費や活動経費等に加え、教員免許所有者やカウンセラーを配置した場合に補助額を加算するなど、民間施設を利用した場合でも学習指導やカウンセリングなどの支援が受けられるようにする。

⑤ 不登校児童生徒の保護者への補助

保護者アンケートによると、子供が不登校になってから「金銭的な負担が増えた」と回答した保護者が約4割いた。日中子供の面倒を見るために働くことができなかつたり、フリースクール等の利用料がかかたりすることが考えられる。そこで、利用不登校児童生徒が学校外で学習等を行う場合に生じる保護者の経済的負担を支援し、児童生徒が社会において自立的に生きる基礎を培うための選択肢の充実を図るため、民間の不登校児童生徒支援施設を利用する際の利用料を支援することとする。

⑥ 保護者に対する相談支援

子供の不登校で悩んでいる保護者は、どこに相談すればよいか、どこでどのような支援を受けられるかといったことが分からずに一人で抱え込み、孤立して精神的に疲弊してしまうことがある。

子供が不登校になる前から、スクールカウンセラーや相談機関、支援機関等の情報をホームページやチラシ等、様々な媒体を通して児童生徒と保護者に周知しておく必要がある。いつでも気軽に相談できる体制を整えることで、保護者の不安の解消を図ることが望まれる。

また、学校が支援に当たる際は、学校職員だけでなく、スクールカウンセラーやスクールソー

シャルワーカーなど、必要に応じて多様な関係職員で関わり、将来的な見通しが持てるように保護者を支援する必要がある。さらに、不登校児童生徒を持つ保護者同士がつながりを持つ交流の場として、学校の余裕教室を提供するなど、希望者に対して協力することが望まれる。

⑦ 家庭にいる児童生徒への支援

家から出ることができないため、校内フリースクールや民間の不登校児童生徒支援施設等には通所せず、日々家庭で過ごしている児童生徒が一定数いる。長期欠席児童生徒アンケートでは「学校を休んでいるときに思ったこと、感じたこと」の質問に対し、小学生は回答者の約45%、中学生は約49%が「自由な時間が増えてうれしかった」と回答しており、自由に過ごしながら、元気や活力を取り戻していることがうかがえる。

一方で、「勉強の遅れが心配だった」と回答した小学生は約47%、中学生は約65%と、学習面での遅れを心配している児童生徒もいる。家から出るとは難しいが学習支援を希望する者に対しては、学校授業のライブ配信や、茨城県が単元毎に配信するオンライン授業「いばらきオンラインスタディ」及び市独自のICT教材「チャレンジングスタディ」を活用することで、学習環境を保障する。